

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2016-11-16

APM news 162

秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)

第36回美術館大学

「日本ブックデザイン賞2016について」

10月8日(土)pm3:00~pm4:30 / 受講者:60名 / 講師:秋山孝、御法川哲郎、高橋庸平



〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8
TEL 0258-39-1233



日本ブックデザイン賞(JBD)2016は、昨年に引き続き2回目の開催となる秋山孝ポスター美術館長岡(APM)主催のコンペティションである。全国から作品を公募し、今年は625点の応募作品が集まった。第36回美術館大学では、審査委員長の秋山孝、入選者兼スタッフの御法川哲郎、受賞者の高橋庸平氏の3名でJBD2016について鼎談を行った。

御法川は出品者と運営側、2つの立場からJBDの魅力を決定的に語った。ブックジャケット部門には課題図書が設定されており、出品者はその課題図書に沿った内容のジャケットを制作するが、同じ図書を選択してもその表現は様々である。自分の作品と他者の作品を比較し、その違いを認識することはより深い理解につながる。また、運営に携わることで教育機関からの大口の応募の多く、JBDはビジュアルコミュニケーションの学習に有効であることに気づいた。大学という枠を超え、全国から集まった作品同士が競うコンペの場合は意義があると述べた。

ブックジャケット文庫判部門で金の本賞を受賞した高橋氏は、現在大学院でポスターを専攻している。高橋氏はポスターを専攻する自分がブックジャケットのコンペに出品することに不安を感じていたという。それを解消してくれたのがチェコの画家ヨゼフ・チャベックの著書『本の表紙の作り方』の一節である。「本の表紙はポスターのようであるべきだ」。その言葉で考え方が変わり、ポスターのように表現したという。その高橋氏が語ったJBDの魅力とは、「ポスター美術館が主催するブックデザインのコンペ」だということ。秋山館長はそれを聞き、美の表現であるポスターと、知を詰め込んだ本とは、印刷物という共通項もあり、響きあう関係にあると語った。

質疑応答では、鼎談中に出てきた課題図書という問いかけに対して制作した作品を「解答」と表現したことについて議論が交わされた。果たして「解答」という言葉は正しいのか、また、図書を読まずに描かれた作品は「解答」といえるのかについて問われた。御法川は、解答という言葉だと予め正解が用意されているように感じられるので、この場合は解釈と言った方が相応しいと答えた。高橋氏は、作品を制作する上で図書を読むだけでなくその背景までも研究することの重要性を訴えた。「マッチ売りの少女」の作者アンデルセンの時代、マッチは箱入りでなく紐で束ねられていた。そうした時代背景を調査することは重要であると述べた。質問者は、背景を知れば課題図書への理解が深まり、応募作品に反映することに納得した様子だった。

最後に、秋山は本の今後について言及した。昨今電子書籍が登場し、紙の本の未来が危ぶまれているが、「残るべきものは残る」というのが秋山の考えである。紙の本と電子書籍の両方が住み分けをしながら残っていく。JBDは、今後も開催を重ねながら、趣旨に賛同し共鳴する人々を増やしていきたいと語った。(森山奈帆・APM職員)